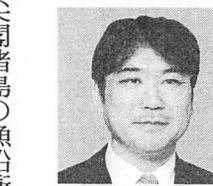


戦後日本人の中国像

馬場公彦著



評・井上 寿一

いのうえ・としかず
1956年、東京生まれ。専門
学習院大学教授。著
書は『吉田茂と昭和史』
など。

日中「国家像」の再構築を



尖閣諸島周辺での衝突事件を巡り、北京の日本大使館前で抗議活動を行う中国の若者ら(9月8日)

関連記事255件である。私たちほど
の貢献でも自由にデータを引き出し
て、日中関係を考えることができる。
これらの雑誌記事の内容は、政治・経
済・社会・文化・思想などのあらゆる分

野に及ぶ。データは著者が整然と可能な
限り客観的に配置している。だから関心
に応じて、任意のところから読み始めて
も大丈夫だ。以下では時間軸に沿って、
日中関係が緊張している。中国人船長の
釈放にもかかわらず、中国側は謝罪と賠
償を要求した。対する日本側はこれを拒
否する。対立がエスカレートするなかで、
日中関係はどうなるのか。相互不信の悪
循環に陥ることを回避しつつ、問題を原
理的に考える際に役立つのが本書だ。本
書は一つの巨大なデータベースであ
る。ここには何が蓄積されているのか。
敗戦(1945年)から日中國交回復(72
年)までの時期における総合雑誌の中国

野に及ぶ。データは著者が整然と可能な
限り客観的に配置している。だから関心
に応じて、任意のところから読み始めて
も大丈夫だ。以下では時間軸に沿って、
日中関係が見誤ったのか。戦後
はこの反省から再出発したはずである。
ところが反省は活かされない。冷戦下の
日本の中中国觀は党派的思考によって分断
される。国際政治のパワーゲームが日本
を翻弄する。スターリン批判、中ソ対立、
中印紛争、中国の核保有。その度ごとに
中国觀は分裂した。

なかでも深刻な影響を及ぼしたのが文
化大革命である。中国国内の権力闘争を
日本の革命の理想と誤認したことの代償
は大きかった。「日本文化大革命」は幻
想だった。毛沢東主義者の連合赤軍のメ
ンバーは米中接近にわけがわからなくな
る。「山荘でニクソン訪中のテレビ観き



△ばば・きみひこ=1958年、長野県
生まれ。出版社勤務。東アジア論、日
中関係論が専門。

時代に遅れ銃を撃ちたり」(坂口弘)。
日中國交回復後、もはや日本人は「内な
る中国」を問わなくなった。中国は観察
の対象(「外なる中国」)に過ぎなくな
っていく。

結局のところ戦後日本は再度、中国認
識の確立に失敗したのか。本書の客観的
な分析はそうだと答えるだろう。しかし
著者は同時代人の心情を代弁せざるにはい
られない。複雑で多様な立場を異にする
1347人の言説に等しく寄り添うよ
うに、内在的な理解に努めたからである。
著者は挑発する。今の日本の中国論に
「自己の思想信条を賭けた投企」がある
のか? 安全な場所からの傍観者的な中
國論にあるはずがない。

それでは私たちはどうすればよいのだ
ろうか。本書からの示唆を得て、つぎの
3点を挙げる。

第一は多面的な国家としての中国像の
再構築である。「中国とは国益を追求す
るナショナリズムの大國である」。中国
革命に戦後日本を仮託した言説が知的格
闘の末にたどり着いたこの結論は重い。
他方で中国は、急速な経済発展に成功
した後発国もある。中国を国家モデル
とする途上国は少なくない。私たちはさ
まざまな角度から光を投げかけて、多面
的な中国像を再構築するべきである。

第二は非対称的な日中関係の是正であ
る。戦後の日本は中国からの一方的な受
信が多く、発信は少なかった。たとえば
△革命△の輸入はあっても、△民主主
義△の輸出はなかった。その結果、非対
称的な戦後日中関係が形成された。
非対称性を是正するためには、あらゆ
るレベルでの相互交流の拡大をとおし
て、△自由△と△民主主義△の価値を發
信することが必要である。価値観を共有
しない、異質な他者△中国との共存はむ
ずかしい。それでもノイズで惑わされる
ことなく、日本は関係改善に向けてシグ
ナルを発信し続けなくてはならない。

第三は新しい日本の自画像の確立であ
る。戦後において「中国とは何か」を問
うということは、「日本とは何か」を問
うということだった。その帰結は本書の
結論のとおりであった。中国に対する責
任感のとおりである。私たちが中国に対
する贖罪意識よりも歴史に対する責任
意識に裏付けられた、自立的な自画像を
確立するべきである。その日本が明確な
原則の下で対中外交を開拓すれば、国際
社会に平和と安定をもたらすだろう。